

# 了惠上人の傳に就て

石橋 誠道

## 一 その時代

了惠上人生存の年代は、鎌倉時代の末期、寛元元年から元徳二年の頃まで約八十餘年間で、其の間の天皇は、八十八代の後嵯峨天皇、八十九代後深草天皇、九十代龜山天皇、九十一代後宇多天皇、九十二代伏見天皇、九十三代後伏見天皇、九十四代後二條天皇、九十五代花園天皇、九十六代後醍醐天皇の治世の間で、實に九代の天皇の交替があつた。また、執權北條氏からいへば、時頼、時宗、長時、政村、貞時、師時、宗宣、熈時、基時、高時、貞顯、守時の時代であつた。この間に於て、南都北嶺の争、三井寺と延暦寺との争議なき幾多の小せり合が繰り返へされたが、當時最も國民の心膽を寒からしめたものは元寇の亂であつた。然しこれも間もなく平穩に歸したので、まづ大體に於ては平安の時代であつた。

當時中々名僧も多かつた。まづ有名な人々を擧げて見るに、日蓮、親鸞、一遍等は各々一宗を開き、唐招提寺の大悲菩薩、西大寺の興正菩薩は南都の戒律を中興し、淨土宗では記主門下の六派が成立した。然しながら何んといつても禪宗の勢力が盛んであつたところは争はれない事實である。即ち當時は禪家の高僧が續々支那から來朝して、多く我國に歸化した爲に、幕府も之を優待し、民衆も競ふて歸仰して、大にこの宗が盛んになつて來た。同時に、我國からも立派な人々が輩出した。即ちその中有名人を擧れば、蘭溪禪師、無學禪師、一山禪師は歸化僧であり、兀菴禪師は一たび日

本に來つて後に宋に歸つた人である。また我國の有名な人では、永平寺の道元禪師、東福寺の聖一國師、圓覺寺の佛光國師、萬壽寺の大應國師、天龍寺の夢窓國師、南禪寺の佛燈國師、雲巖寺の佛國々師等があるが、その他なほ有名な人が澤山ある。即ち人物の點からいへば、全く禪宗の全盛時代といふも敢へて過言ではあるまい。また民衆の信仰の上からいつても恐くは禪宗が第一位を占たであらう。そは舊來の宗教には、種々の弊害が伴つて、萎靡不振の状態である所から、鎌倉時代の初より新宗教が續出して、其等に取つて代らんとした中、まづ禪宗と淨土宗と日蓮宗とが、轡を並べて走り出したが、支那禪宗の影響并に來朝高僧の應援やら、また武家諸公が禪味を政治にも應用して、實質強健の氣風を養成せんとした所から、此の宗に歸依する者漸く多く、遂に禪宗が最も勢力を得るやうになつたのであらう。

次に著述の上から考へるに、この時代の代表者としては、新義真言宗の賴瑜阿闍梨と東大寺の凝然大德と、親鸞上人と、記主禪師と、日蓮上人と、了惠上人等を擧げてよからうと思ふ。その他宗性の俱舍論明思抄四十餘卷、了澄の阿婆縛抄百卷、無住の沙石集十卷、有範の大日經疏妙印抄三十卷、舜昌の法然上人傳四十八卷、虎關の元亨釋書三十卷、湛峯の起信論義記教理鈔十九卷、向阿上人の三部假名鈔七卷等もみなこの時代の有名な著述ではあるが、賴瑜、凝然等とは比べものにはならない。

斯様に新宗の勃興と共に、またその教義が熱心に研究せられた時代であつたのに、特に淨土宗は記主門下の六派が互に研究に研究を重ねて、眞義を發揮せんと思つた時であつたから、了惠上人もまたその研究に、生涯没頭されたのであつた。上人の著述として今残されてあるものは、其等の研究の粹であると言はねばならぬ。

## 二 蓮華堂と望西樓と悟眞寺

了惠上人は又道光といひ、その住所を蓮華堂、望西樓、悟眞寺と稱へた。所が此等がどの邊にあつたかといふことを

今明かに知るこゝが出来ない。然しながら、名越の良山上人の著と傳ふる黒衣相傳には(續淨土宗全書名越叢書)五條大宮蓮華堂道光上人了惠と記されてあるから、恐くは五條大宮の附近であつたらうと思ふ。

また寺町の清淨華院の所藏である、了惠上人自筆の圓頓戒譜の終りに、了惠の弟子の隆惠が、文保元年の二月、洛陽五條坊門大宮悟真寺の方丈で、了惠上人から、その圓戒譜を相承したこゝが奥書されてあるから、悟真寺もまた五條大宮にあつたこゝは明かである。してみるに蓮華堂と、望西樓と、悟真寺とは全く同一の所であつたではあるまいかと思はれる。何故なれば、此の三名は全く一寺の異名であつたかも知れないからである。今淨華院の圓戒譜の奥書を下に轉載してみよう。

文保元年二月十八日初更奉授

沙門隆惠一畢

望西樓沙門了惠(華押)

文保元年二月十八日初更於洛陽五條坊門大宮悟真寺方丈佛前奉値先師了惠上人受之

と記されてある。そうして昔の五條坊門といふのは今の佛光寺通りであるから、今の太宮佛光寺附近が即ち昔の五條坊門大宮である。であるから太宮通の五條から佛光寺邊までの間に悟真寺があつて一名之を蓮華堂と名付け、またその堂の附近には、餘りに家屋の障害もなく、見渡す限り晴れやかで、西方を望むに最も都合のよい所から望西樓と名付たのではあるまいか。若し然れば其名は三種になつてゐるが遂に一所を顯はすに過ぎない。けれども西方願求者に最もふさはしい望西樓といふ名を、了惠上人は多く使はれたものではあるまいか。

所が了惠上人の著、論註略鈔上卷の撰號に、良忠上人面受弟子三條道光望西樓了惠と記されてあり、又西譽上人の著、淨土三國佛祖傳集上卷には、三條悟真寺了惠と記し、蓮門宗派には、三條悟真寺道光と記し、又袋中上人の著、淨

土血脈論下卷には、三條流祖道光了惠記されてある。若しこの記事から考へて見るに、悟眞寺は三條にあつたものゝしなればならない。所がその三條のきの邊にあつたか、解らない。そこで了吟の著、新撰往生傳三卷には、了惠上人は洛東三條に悟眞寺を創立されたが、此處は時々鴨川の水が溢れて困つたから、三條東洞院(今の三條郵便局附近)に移した。然し此處もまたしばしば兵火に罹つたから、四條の北、大宮の西に移轉したといふ説を傳へてゐるが、然しこの新撰往生傳よりも少し早く作られた蓮門精舎舊詞第二卷に、悟眞寺は洛陽四條大宮西入る所にあり、起立は慶長十九年で、開山は登譽上人であるといつて、前の悟眞寺と何等の關係がありそうにも思はれない。斯ふして見るに新撰往生傳の説が果して真か偽か疑はしい心地がする。

また袋中上人傳の中に、檀王法林寺に關する記事の一節があるが、この記事に依つて見ても、了惠の悟眞寺と何等の關係もないやうに思はれる。即ちその一節を下に記すこととする。

又上人六十歳、慶長六年の春、洛陽第三橋の邊に、伏見次郎兵衛といふ人あり、久しく對面のほごも打たへぬれば、上人尋ねさせ給ひけるに、次郎兵衛いよよろこびて、永くもここに留めまほしく思ひて、家の背なる藪をうかちて草菴を作れり、中に小溝の流れあれば、道俗分へだてあり、清閑の地なりて板様の物をかひわたして通ひけり。その比板倉周防守、京都の諸司にて威權肩を比ぶる者なかりければ、松平越中守より使者を使はして、しかくのよしを告げて、東山佛詣の次に、必ず問ひ給へし申送られければ、周防守もやがて尋ね參られけり。聞しよりも見るに勝りて道容の殊勝におはしければ、淨土の法要なんごまごまご尋ね聞て、渴仰の思ひ淺からざりしごなむ。それより道俗貴賤たうごみて往來の人日々に多かりければ、そのわたりの人、多く來り集りて、堀をうめ地をたいらげなんごして、堂宇を營造して、遂に寺ごなれり、即ち今の三條法林寺これなり(已上袋中上人傳の一節)

若し果してこの地が、了惠上人が作られた悟眞寺の跡であるごか、若しくは袋中上人が廢絶してゐた悟眞寺の名義を

移して、それを改めて法林寺とされたこととするならば、今少し何ぞか悟真寺と関係のある記事がありさうなものだと思ふ。よつて檀王の法林寺は、袋中上人の後の誰人かぞ、之を了惠の舊跡悟真寺の跡として盛んに吹聴したものであるまいかと思像さる。淨土宗全書十七卷に收められてある袋中上人傳は、上人御生存中に山城瓶原の山田氏が、上人の行狀を見聞したまゝ、を書き記し、それに義山上人が多少手を入れて作られたもので、比較的正確であるにも關らず、その傳の法林寺を記する所に、了惠上人の悟真寺に關する何等の記事のない所から見ても、恐くはその當時は、悟真寺と法林寺と何等關係ある傳説のなかつたことを證據立るものではあるまいかと思ふ。斯ふした譯で、今の檀王が果して悟真寺の跡であるかないかといふことは、今少し研究を要すると思ふ。

所が了惠上人の著論註略鈔上の始の撰號に三條道光望西樓了惠記と記されてあるから、了惠自ら三條道光と言ふてゐるではないかといふ考も起るであらふが、了惠の著述が多々ある中に、一も三條道光と記したものが無い。然るにこの著述のみ三條道光と記されてあるのはどうもおかしいのみならず、三條道光、望西樓了惠記とされてあるは、上人の名が道光と了惠と二重に記されてあることになり、いよく怪しく思はる。からは恐くは後人が、三條道光丈は後に加へたものであらふと思ふ。斯ふした譯で三條悟真寺といふことに就ては今少し研究しなければ確定することは出来ないと思ふ。

### 三 華藏寺と萬壽寺

嚴島の光明院所藏の了惠上人自筆の圓戒譜及びその裏書、并に京都の清淨華院の同上人自筆の圓戒譜に依れば、了惠上人は、華藏寺の慈明上人から圓頓戒を相承されたことが記されてあり、その慈明上人は、華藏寺の第二世で、了惠上人は華藏寺の第三世であることが記されてある。

又義山上人の和語燈錄日講私記一卷に依るに、慶長二十年板行の大經鈔第一卷の奥書には、正安二年七月十三日、華藏寺に於て老眼を拭つて之を清書畢る、この功德を以て留て後見に贈る、信謗皆な悉く往生の縁を結ばん、望西樓沙門了惠謹んで疏す書いてあつたこが記されてあり、又同日講私記一卷に、了惠上人は七條壬生のあたりにも住給ふ、其處を華藏寺といへり、爾れども遺跡知れず記されてあるから義山上人の時に既に華藏寺の遺跡が解らなかつたやうである。

又了惠上人の著述である尊問愚答記の終の所に、尊問愚答記、華山院問、華藏寺答書いてある。

此等の記事から考へて、了惠上人は華藏寺に住居されたこは疑いないが、その華藏寺の舊跡は今明かに知るこは出来ない。

所が檀王法林寺の第二世良仙園王上人の記録に依れば、袋中上人が稻野玄蕃から華藏寺の舊跡を譲り受けて、其處に法林寺を再興されたのであるこ記されてあるが、これも又檀王法林寺を悟眞寺の舊跡であるこ主唱するこ同様に確乎たる證據もなし、又袋中上人の傳記の中に何等の記事が残されてないから、容易く信ずるこは出来ない。特に義山上人が華藏寺は七條壬生のあたりであるこ言はれてあるから、それには何等かの據所があつたに違いない。してみるこ華藏寺はまづ七條壬生の邊にあつたこ考へるが最も穩當であらふこ思ふ。

然しまた斯ふいふこを考へてみるも、あながち無益ではあるまい。この華藏寺といふは、蓮華藏院のここではあるまいか、蓮華藏院は、鴨川の東、二條通の附近にあつた寺で、永久二年に、白河上皇が建立し給ふた天台宗の寺であり本尊は九體九品阿彌陀佛の像を安置したこ傳へられてある。その事は諸種の記録に明かに記されてある。所が後世追々に變化して、この蓮華藏院を蓮華藏寺と稱へ、遂にはそれが變化して、華藏寺と稱するやうになつたのではあるまいか。そうしてそこに了惠上人が住はれたが、後にそれが荒廢して唯名のみ残つてゐたのを、それを華藏寺又は悟眞寺の遺跡

ミ稱して、後に檀王法林寺を興したのではあるまいか。若し然れば、義山の和語燈錄日講私記一卷に、了惠居住の遺跡詳かならず、案するに大寺ミ見へたり、望西樓なきあるが故に、樓ミは今の山門の様なるものなり、三條悟真寺ミあれば、今の三條河原より東、三條通よりは北の方なるべきか、今の三條の悟真寺にはあらず、是は新地なりミ記されてあるのに符合する點があるかミ思ふ。いづれにしても他日何等か今少し確實な史料が出るまでは、之を確定することは出来ない。

さて又淨華院并に光明院の了惠上人自筆の圓戒譜、并に了惠上人の著、菩薩戒義疏見聞第一等に依れば、上人は洛中萬壽寺の覺空上人から天台の圓頓戒を相承されたことが記されてある。それゆへに萬壽寺ミ覺空上人のここに就て少し記しておきたいと思ふ。

古事類苑宗教部三卷に依るに、萬壽寺はもミ郁芳門院追嚴の道場であつた。昔はこれを六條院ミ稱へた。郁芳門院は諱を媿子ミいひ、白河上皇の長女で、右大臣顯房の第一女、中宮賢子ミいふはその母であり、堀川天皇はその弟である。嘉保三年丙子秋七月の下旬に御病氣が起り、八月二日大赦して祈り給ふたがその甲斐もなく、八月七日に二十一歳で御登遐遊された。同九日上皇は哀悼に堪へずして落飾し給ひ、二十六日蓮臺寺の側に葬り、永長二年に郁芳門院の遺宮を革めて佛寺ミなし、俗に六條御堂ミ稱へた。十月十四日供養の時、上皇は聖躬の血を以て、永劫護法の願文を書き給ふた。その願文の要點は下の通りである。

世漸く澆季に及び、末法に屬すミいへぎも、我がこの願を改むべからず、遠く三會の曉を期すべし、我れ速かに九品を證せば、天眼を以て之を鑒るべし、我れ暫く三有に留らば、怨念を以て之を罰せん、何れの世の聖君か我が後裔に非らん、誰の家の賢臣か我が舊僕に非らん、一事一言も之に違し之に背かば、國主皇帝、殊に炳誠を加ふべし。

(一〇九七)  
永長二年十月十四日

斯くて自ら手痕を留めて信を表し給ふたから、之を御手印といつた。而して藤原國明は、江州田井郷を寄附し、佛法王法の庇護を仰いだ。(一)九九 康和元年正月四日、六條院は火災にかゝり、八月十二日に再建供養があつた。(二)五七(二)五八

正嘉年中に、空上人(十)地上人、又は爾一上人(い)ふ、その弟子寶覺上人(慈)一上人(い)ふと共に、この寺で淨土教を修せられたが、寶覺上人が、東福寺の聖一國師の道風を聞いてその室を扣き、針芥相ひ投じ、覺空上人もまた國師に(二)六二見えて立旨を領し、二師ともに淨土宗を捨て、禪宗に歸し、六條御堂に扁額を掲げて萬壽禪寺と稱するに至つた。弘長元年十一月二十四日に、寶覺禪師は禪苑開堂の儀を旌はした。そこで寶覺禪師と、覺空禪師と兩人を共に開山とした。(二)七二 元永九年十一月二十四日に供養し、同十年十月十二日に火災があつた。了惠の菩薩戒義疏見聞第一に依るに、覺空上人は弘安九年七月廿八日に端坐念佛して往生されたことが記されてあるから後又念佛を續けられたやうである。(一)三三〇 元徳二年九月二十日、内親王崇明門院が新に田地を賜はつたから、境内を擴張し、北は樋口、東は高倉、西は東洞院を界みなすに至つた。然しながらこの寺は、後に東福寺の山内に移された。

#### 四 了惠上人の事蹟

了惠上人の事蹟は、今は委しく知ることが出来ない。上人の舊跡と稱せられてある檀王の法林寺でさへも、殆んぎ全くその史料がない。淨土三國佛祖傳集上を始として、法水分流記、宗派流傳、淨土血脈論下、鎮流祖傳第三、新撰在生傳第三、淨土列祖傳第三、本朝高僧傳第十六、和語燈錄日講私記第一、淨土傳燈總系譜上、淨統略讚等に記されてあるが、いづれも皆な委しくない。然しながら今此等の書を參考して、その大要を記したいと思ふ。

了惠上人はまた道光(い)ひ、その住所を蓮華堂または望西樓と稱へた。蓮華堂及び望西樓の考證は前に述べた通りであるが、望西樓の語は恐くは般若舟讚の中の、一切時中、西を望んで禮して凡聖の心相向ふことを表知せよ、佛は衆生の

心の雜亂なることを知つて、偏に正念して西方に住せよと教へ給ふといふ文から取つたであらふといふ新撰傳の説に大に贅意を表したい。然しながら或は又上人の居住の周圍が晴れやかで、西方を望むに適當であつた所から其の居室を望西樓と命名されたのかも知れない。

上人は相模國鎌倉の人、穴戸常重の子息で、後嵯峨天皇の寛元元年に生れ、後深草天皇の建長五年に十一歳で、叡山に登つて尊惠に従つて剃髮された。この尊惠といふ人は本朝高僧傳第六十八に記されてある慈心尊惠のこゝではあるまいかと思ふ。依て今参考の爲に、本朝高僧傳の文をこゝに引いてみたいと思ふ。

本朝高僧傳第六十八に云く、釋慈心、字は尊惠、少にして叡山に上り、台教を習覈す。法華三昧を修し、後に攝の清澄寺に住す。一日有馬の温泉寺に到り、清涼院に止り、妙經を勸説す。承安二年七月中旬、冥請を感じて閻羅王の所に赴く。王は地界の衆を集め、法華十萬部融通本願會を修し、心を慶讚の導師となす。會散して閻王歡喜し偈を以て讚す。心は王に謂て曰く、一切衆生、愚痴邪見にして因果を信ぜず、多く惡因を作り、五道に輪廻す、金口慇懃の慈説、遺して貝葉寶函に載するに、信ぜざる者尙ほ多し、王よ何かなる方便を以て之を救ふべきや。王は乃ち偈を與へて曰く、妻子、王位、財眷屬、死去せば一も來て相親むものなし、常隨の業鬼我を繫縛し、苦を受け叫喚するこゝ邊際なし。また云く、是の日に已に過ぎぬ、命もまた隨て滅す。小水の魚の如し、斯に何の樂あらん。かつ曰く、師は本土に還り、此を以て衆に示せし。因て自ら金字の妙經を親書す。心は某年を以て、端正にして寂す。平日法華經を誦するこゝ、三萬六千七百五十餘部、彌陀の號を稱ふるこゝ、三十萬七千遍なり。

已上は尊惠の傳であるが、この中尊惠の惠の字が了惠と相通する點、又常に彌陀の名號を稱へられたる點等、了惠上人と何等かの深い關係がありさうに思はるゝから、或はこの人かとも思はるゝが、然し年代に於てや、早きにすぎはしないかとも考へる。然し若し尊惠が長壽の人なれば、別に不可能の事ではない。依て今参考の爲に高僧傳の文を轉載した。

上人は天性英敏、持律堅固で、廣く權實諸部の學を修め、また大小乘の戒律を學び、孜孜として法華讀誦の行を勵まされたが、後に天台を去つて淨土教に歸し、記主禪師の門に投じて、淨土の教義を研究された。かくて文永十一年十二月八日、上人三十二歳の時、漢語燈錄十卷を撰集し、建治元年正月二十五日には、和語燈錄五卷を撰集された。そはその當時、淨土の教義に異説が多く、やゝもすれば宗祖の正義が失はれんことを有様であつたから、たゞひ片言隻語といへども、最も大切に之を保存し、宗祖の眞意を永く後世に傳へやうとて、二十餘年の日子を費やし、拾ひ集めて輯録結集されたものである。そは實に釋尊に對する阿難の結集にも比すべき大事業であつたことを深く感謝せねばならぬ。

建治元年に又た尊問愚答記一卷を作り、龜山天皇に奉答された。寺傳に依れば、建治元年三月十五日、龜山天皇は、花山院通雅公を使者として、淨土の要義四十八問を尋ね給ふたから、上人はそれに奉答されたのである。

建治三年十二月三十日の二更、洛陽の華藏寺に於て、圓頓房慈明上人から、圓頓戒を受けられた。

弘安二年十一月二十九日、三祖記主禪師に従つて、再び圓頓戒を受けられた。

弘安三年二月八日、三祖から末代念佛授手印を傳受された。今その本は滋賀縣の新知恩院に秘藏されてある。

又同年二月十三日、洛陽萬壽禪院の覺空上人に従つて、普通廣釋を學び、同年夏中に天台菩薩戒義疏を學び、同四年に之を終つた。

弘安六年の頃、宗祖の傳記を後世に傳ふべく知恩傳二卷を著して、宗祖の事蹟、并にその鴻德を記載し、之を後人に遺された。この傳記は久しく人の知らなかつたものであるが、近來大正大學の高瀬承嚴氏が或る書店から發見して、珍藏する、斯である。

弘安七年七月二十九日、萬壽禪院の方丈佛前に於て、覺空上人に従つて重ねて圓頓戒を相承された。此等の圓戒相承の事は、京都の清淨華院并に嚴島の光明院所藏の上人自筆の圓戒譜に依つて明かである。

又この年の十二月、二祖聖光上人の別傳を編纂された。所がこの別傳を編輯された後に於て、不思議な夢を見られたことが、傳の終に書いてあるが、これは後の著書の下で委しく述べるこゝ、する。

弘安十年の七月六日、上人四十五歳の時、三祖記主上人入寂し給ひ、同年八月、木幡の慈心の請に依て、三祖の別傳一卷を著はし、正應元年十二月十八日に、それを清書された。

永仁四年正月十三日、上人五十四歳の時、無量壽經鈔七卷を著はされた。その由來は同輩の慈心三禮阿まが、切りに懇請した爲に、止むなく撰述されたので、委しいこゝはこの書の跋文に記されてある。

永仁四年五月、選擇大綱鈔三卷を著はされた。其後元亨二年二月二十八日に眞惠が之を淨寫した。

嘉元四年に、論註拾遺鈔三卷を作られた。

正和六年正月二十日(後に文保三改元)その弟子隆惠に、上人自筆の末代念佛授手印を授けられた。今その授手印は博多の善導寺に秘藏されてある。

文保元年二月十八日の初更に、洛陽五條坊門大宮悟眞寺の方丈佛前で、上人自筆の圓戒譜を惠隆に授けられた。その圓戒譜は今京都の清淨華院の珍藏である。その圓戒譜には、隆惠の筆と思はる、左の奥書がある。

文保元年二月十八日の初更、洛陽五條坊門大宮悟眞寺の方丈佛前に於て、先師了惠上人に値ひ奉つて之を受く。

文保元年にはまた、傳通記料簡鈔六卷を著はされた。

斯の如く道名日々に高まりつゝ、ありし間に、德聲漸く天朝に達し、伏見天皇は宮中に召して、淨土の法門を問ひ給ひ、また圓頓戒をも授け奉り、歴代の聖帝、しばしば召して宗要を尋ねさせられ、緝紳淑女もまた歸依する者が多かつた。傳へられてある。

元亨元年の七月に、圓智上人が和語燈錄を開版し、了惠上人は自らその版下を認められた。依つてその終に跋文を書

いて云く、

沙門了惠、感歎に堪へず、隨喜の餘り、七十九歳の老眼を拭ひて之を書す。

元亨二年正月二十五日、語燈錄の書を知恩院に奉納されたが、その啓白の時、紫雲天に棚引き、その影池に映り、參詣の人々、みな之を見て互に信心を増進した。この時上人は、自ら一首の和歌を詠んで、その感想を述べられた。その歌は、

黒谷の清き流を汲む人ぞ心の水は濁らざりけり

このこゝは名越の尊觀の弟子の明心が、書を了惠上人に送つて、極樂新生の凡夫の色身は、有漏なりや無漏なりやこいふ質問をした時、了惠上人が答へられたその答書の終に記されてある。今その文は續淨土宗全書の中、名越叢書の中に收められてある。

元亨二年十月上旬、扶選擇正輪通義一卷、新扶選擇報恩集二卷を著はして、明惠上人の摧邪輪并に莊嚴記を反駁された。その言甚だ鋭く、用意もまた周到である。

元徳二年、上人八十八歳の時、天台菩薩戒義疏見聞七卷を作られた。この書は弘安三年の四月から一夏の間、洛陽萬壽禪院の覺空上人に従つて、天台戒疏を學ばれたすべての見聞のまゝを、清書されたものである。こゝがこの書の終に述べられてある。

已上は上人の傳記、傳宗、傳戒、著述等の大要で、これ已上に委しくそれらを知ることには出來ない。上人著述の方面は比較的によく今なほ残つてゐるので其方面は多少委く知ることが出来るが、事蹟行狀の方面は殆んど知ることの出來ないのは如何にも残念なこゝである。

上人示寂の年代に就ては確實なる文献の徵すべきものがない。所が檀王法林寺に、比較的古い了惠上人の位牌がある。

その表には、三條派祖特賜廣濟大和尚道光上人位と書し、その裏面には、當寺草創、龜山帝文永九年以元德二年三月二十九日寂、春秋八十八と刻されてあるから、古來これに依て上人の示寂の年月を定めてゐるが、然しこの位牌も恐くは圓王上人の頃作られたものではあるまいか疑はる、點があるから、直ちにそれを信ずることは出来ない。かつこの位牌に記す所の元德二年の三月二十九日を以て、上人示寂の日とすれば、こゝに一つの矛盾が起るのである。そは上人の著述である天台菩薩戒義疏見門第七卷の終に、

時に元德二年十二月十一日、八十(八)歳の老眼を拭ふて一部七卷の見聞を寫す、見ん人必ず念佛十遍を唱へて、愚老の沈淪を救ひ給へ、望西樓沙門、菩薩比丘了惠謹疏、在御判

と記されてある。既にこの書に斯くも明白に元德二年の十二月十一日に自ら書寫されたことが書いてあるのに、かの位牌にはその年の三月二十九日に寂せられたと記すのは甚だ怪しい譯である。斯ふした譯でこの位牌は、この書を見ない誰人かに依つて作られたものであることが想像さるゝ。依つて余はその翌年即ち元弘元年七月十九日に八十九歳で寂せられたのではあるまいかと思ふ。そは諸傳記の中の最も古い法水分流記に、元亨九七十九、七八九と記されてあるが、これは恐くは、元弘元、七、十九、亡、八十九の誤りで、即ち元弘元年、七月十九日亡、八十九歳の意味であらうと思ふからである。亡といふ字を使ふこゝは法水分流記には他にその例が一二ある。今その例を擧げてみるこゝ、圓性の事を記す下に、阿日眞弟觀應二十一十五亡六十四圓福寺入室と記されてある。此は恐くは阿日の眞弟、觀應二年、十一月十五日亡、六十四歳、圓福寺入室といふ意味であらう。又仙覺を記す下に、淨慧眞弟延文五五二十三亡六十四と記されてあるが、これは恐くは淨慧の眞弟、延文五年、五月二十三日亡、六十四歳といふ意味であると思ふ。此等の例から考へて、元弘は音で誤り、九七七は形で誤つた寫誤であらふと思ふ。されば了惠の寂年を元弘元年七月十九日、八十九歳で寂せられたとすれば、先の矛盾もなくなるし、また元弘元年が丁度八十九歳に當るから、諸種の疑問がこゝに解決す

る譯である。依ていさ、か余の私見を述べて諸彦の是正を仰ぎたいと思ふ。

而して後醍醐天皇は、上人の徳を彰はして、特に廣濟和尚の號を賜はつたを傳へられてある。

惟るに上人は、誠に温厚篤實な人で、學問に最も忠實であつた。記主門下の六派の中でも、白旗上人を除いては、最も多くの著述を後世に残された。これ蓋し宗祖の正義の失はれんことを恐れ、異流邪義の跋扈を防がんことを、愛宗護法の赤心から、送り出した結晶である。而して上人は道念堅固であると共に、また謙遜の美德にも勝れ給へる眞の宗教家であつたことは、遺文を熟讀する間に、自らそれを自覺することが出来る。然しながら餘りに學問に忠實であつた爲に、門弟の養成、信徒の薰育等に乏しかつたのであらふか、その門流は實に寂莫であつたやうだ。

そして上人の著述の中、現存するものは十八部、五十六卷さいふ數を示してゐる。この外上人自筆の授手印、並に圓戒譜等がある。今その名目を列記して、その參考に供したい。

漢語燈錄

十卷 (淨土宗全書九)

拾遺漢語燈錄

一卷 (同上)

和語燈錄

五卷 (同上)

拾遺和語燈錄

二卷 (同上)

無量壽經鈔

七卷 (同十四)

無量壽經大意

一卷 (續淨土宗全書十七)

往生論註略鈔

二卷 (淨土宗全書一)

往生論註拾遺鈔

三卷 (同上)

傳通記料簡鈔

六卷 (寫本)

選擇集大綱鈔	三卷	(淨土宗全書八)
扶選擇正輪通義	一卷	(同上)
新扶選擇報恩集	二卷	(同上)
菩薩戒義疏見聞	五卷	(續淨土宗全書一)
往生拾因私記	三卷	(淨土宗全書十五)
尊問愚答記	一卷	(續淨土宗全書四)
知恩傳	二卷	(高瀬承嚴氏藏)
聖光上人傳	一卷	(淨土宗全書十七)
然阿上人傳	一卷	(同上)
了惠上人筆末代念佛授手印	一卷	(博多善導寺藏)
圓頓菩薩戒血脉譜	一卷	(京都清淨華院藏)
同	一卷	(嚴島光明院藏)
了惠上人傳持末代念佛授手印	一卷	(近江新知恩院藏)

## 五 了惠上人と其著述

### 一、語燈錄

了惠上人の著述として最も早く出來たのは即ち語燈錄である。この書は法然上人の著書并に法語等を輯集したもので、謂ゆる法然上人全集である。この書は了惠上人が、扶宗護法の赤心から、法然上人の御言は、片言隻語といへども忽に

せず、二十餘年の日子を費し、拾ひ集めて輯録されたものである。若し上人がその當時、これを蒐輯されなかつたならば、宗祖大師の法語の多くは、恐くは失はれたに違ひない。寔にその功績は偉大なるものと言はねばならぬ。所がこの語燈錄に漢語と和語と兩本がある。漢語燈錄は十卷あり、拾遺漢語燈錄が一卷ある。此は文永十一年の十二月八日に成功した。和語燈錄は五卷あり、拾遺和語燈錄が二卷ある。これは建治元年の正月二十五日に撰集されたものである。今和語燈錄の序文の一部を轉載して、了患上人の撰集の趣意を知りたいと思ふ。

惠心僧都は楞嚴の月の前に往生の要文を集め、永觀律師は禪林の花の下に念佛の十因を詠じて、各の淨土の教行を弘め給ひしかども、往生の化道未だ盛りならざりに、中比黒谷の上人勢至菩薩の化身として、初めて彌陀の願意を明らかに、専ら稱名の行を勧め給ひしかば、勸化一天に普く、利生萬人に及ぶ。淨土宗といふことは、この時より弘まりけるなり。然れば往生の解行を學ぶ人、みな上人をもて祖師とす。こゝにかの流を汲む人多き中に、各の義を取るこゝまぢくなり。謂ゆる餘行は本願か、本願にあらざるか。往生するや、せずや。三心の有様、二修のすがた、一念多念の爭なり。まことに金鍮しり難く、邪正いかでか辨ふべきなれば、聞く者多く源を忘れて流に従ひ、新を貴んで舊を知らず。なほ書に言へることあり。人は舊きを貴び、器は新を貴ぶ。予この文に驚きて、いさ、か上人の古きあこを尋ねて、や、近代の新しき道を捨てんと思ふ。よつて或はかの書状を集め、或は書籍に載する所の詞を拾ふ。やまと言はその文見やすく、其意さこり易し、願くは諸の往生を求人、是を以て燈として、淨土の道を照せしなり。若し落つる所の書あらば、後賢必ず之につけ、時に文永十二年正月二十五日、上人遷化の日、報恩の志を以ていふこゝ爾かなり。

已上は和語燈錄の序文の一部であるが、漢語燈錄の序文にも、此と殆んき同じ意味が書かれてある。而してまた了患上人の頃に既に法然上人に名をかつた偽書が多くあつたので、了惠は語燈錄撰集に際して、眞偽の判別に随分に骨を折られたやうである。その事は漢語燈錄の跋文に、下の如くに記されてある。

漢語燈錄十卷十七章、並に拾遺語燈錄上卷三章、都て是れ二十章は、これ予が二十年來徧く此を華夷に索め、慎んで眞偽を檢して、而して撰集する所なり。この外世間に流る所の本願奧義一卷、往生機品一卷、黒谷の作と稱するは即ち偽書なり。又三部經の總章、四十八願の名目を列ねて、第十八願を十念往生の願と名くる者一卷、及び問決一卷、金剛寶戒章三卷あり、並に又偽書なり云々。

又この語燈錄開版の事に就ては、今度檀王の法林寺から發行せられた、法然上人和語燈錄といふ本に、藤堂祐範氏が委く書いてゐらるゝから、今贅言を費す必要はない譯であるが、然し序手に簡單にこゝに記しておきたいと思ふ。漢語燈錄は永い間、出版さるゝ機會がなかつたが、徳川時代に義山上人が、初めて開版されたのである。和語燈錄は元亨元年了惠上人の生存中に開版せられ、了惠上人御自身に七十九歳の老筆を以て、その板下を書かれたのである。その後寛永二十年に再び出版せられ、正徳元年に義山上人がまた出版されたのである。

所がこの元亨版は、寛永版や正徳版とは、餘程違つた所があり、義山上人でさへ見るこゝの出來なかつたのであるが、偶まそれが京都の龍谷大學に秘藏されてあつたので、今回檀王の法林寺信ヶ原良哉氏は、了惠上人の六百回忌記念出版として、その元亨版を出版された。これは誠に學界に於ける慶事である。

## 二、尊問愚答記一卷

この書は寺傳に依れば、建治元年三月十五日、龜山天皇が、花山院通雅公を使者として、淨土の要義四十八問を尋ねさせ給ふたから、了惠上人が奉答されたものであると傳へられてある。この書は續淨土宗全書の四卷に收められてあるが、それには著述年代が記されてない。然し續淨四卷の附録に依るに此の書は永仁五年に著はされたものと記されてある。けれども此説の典據は何處にあるか寡聞にして今知るこゝが出來ない。檀王法林寺に傳ふる了惠上人の親筆本と稱する者は、其の書の最後に、建治元年三月十五日、洛東華藏寺に於て之を鈔記して留めて後見に贈る、共に生縁を期せ

ん。厭欣沙門了惠謹録に記されてある。が然し此は後世の偽記かも知れない。

### 三、知恩傳二卷

この書は久しく湮没して解らなかつたが、近頃大正大學の高瀬承嚴氏が某書店で發見して手に入れられたものである。その事は大正大學發行の淨土學第一輯に書かれてある。高瀬氏が購入せられた本は、元祿十六年に孝璣といふ人が、江州新知恩院の尊像開帳に就て上洛し、その時良照院の義山上人御所持の知恩傳を拜見し、其年十一月冬至の日にそれを寫し了つたものであることが卷末に記されてある。

この知恩傳の著述の年代は明かに知ることは出来ないが、この傳の終の了惠の跋文に、今先師上人入滅の後、僅かに七十餘廻の星霜を歴し雖も、當世上人に植ひ奉るの輩已に以て希なり。若し委細の傳記なくんば、將來上人の德行を知る者なからんか、仍て諸家の傳説を尋聞して、集記せしむる所なり。留めて後代に贈る。共に往生を期せん。望西樓に於て、之を抄出し畢ぬ。

この中上人の滅後、七十餘廻の星霜あるから、その年代を調べて見るに、宗祖の滅後七十二年目が弘安六年で、この翌年に了惠上人が、三祖聖光上人の別傳を著はされたから、この知恩傳は恐くは弘安六年頃の作であらうと推定したのである。兎も角久しく失はれてゐた知恩傳が、今現はれたといふことは、實に悦ばしいことである。

### 四、聖光上人傳一卷

この書は弘安七年十二月上旬に草記されたものであるが、此月の十六日、それを再治する爲に、復た再讀された夜半に不思議な夢を見られたことが、この傳の最後に記されてある。この記事の文に依つて考へて見ても上人は非常に謙遜な道念の深い人であつたことが能く解る、だから今この文を記すことにする。

予この傳を草記し再治の爲に復た之を見た夜(弘安七年十二月十六日)夢に聖光上人が、先師上人(然阿)と膝を並べて

往生の法門を談じてゐられた。予はかの座に在つて、ひそかに心の中で、聖光上人の影像是、少しも實體とは違はないなと思つた。そこで先師が予を指して「道心があるから、此流を傳ふべき者であります」云申された。その時聖光上人が申さるゝには、「此僧を見るに道心がない。それでも傳法すべきであらうか。彼は悉しく我が事を知つてゐるが、我はまだあの僧を知らない。今始て見たのである」云々。予は無道心の告を聞いて思ふには、今のお告は毫しも違はない。上人は已に他心智を得てゐらるゝのかと思ふて、深く心の中で懺悔した。その時丁度夢が覺めたが、體全體に汗が流れてゐた。これが若し虚言であるならば、願くば彌陀證尉し給へ。夫れ夢は虚實に通じて、記すべきものでないけれども、悉く我が事を知つて告げ給ひ、聊か憑む所があるから、憚りながら之を記した譯である。寫し傳へた人は、さうぞ之を捨て下さい。時に弘安十年十一月追て之を記す。望西樓沙門了慧謹疏。

##### 五、然阿上人傳一卷

この傳は木幡の慈心上人の請に依つて、弘安十年八月下旬に作られたが、その翌年の十二月十八日に之を清書されたことが記されてゐる。

##### 六、無量壽經鈔七卷

この書は永仁三年四月二十五日に(法然上人往生の日であるから)始めて之を草記し、明年正月十三日に功を終へ、同年二月に之を治定された。上人がこの書を作られた原因は、此鈔の終に了惠上人が書かれた跋文に依つてその事情を委く知ることが出来る。その大要は下の如くである。

この書を作つた原因は、先師(記主)上人の上足の弟子慈心が、正應元年の春予(了惠)に對して、「先師の鈔記は殆んみな整ふてゐるのに、唯だ大經の鈔のみが、まだ具つてゐないのは、誠に残念なことです。親しく先師の講義を承つた人々は、或は解つてゐるであらふが、末學者の者に至つては、恐らくは解らぬ所が多いであらふ。希くは先聞を記して、

以て未聞の者を資けよ。予はこの請を受けたけれども、不敏の性、晩學未熟の故に、再三固辭して遂に七年を送つた。

永仁三年の春、重ねて示して言はるゝには、先づ草稿を作り給へ、治定の場合は一門の者が會合して、評議取捨するこゝ、しやうきて、二箇月の間に四度この催促を受けたから、罷むこゝを得ずこの鈔記を作つたが、發起の人々は悦んで、披覽取捨し、同法の禮阿も問答し、再三研究し論評して、而して後に治定し畢つたものである。然るにこの年の秋に至つて、圖らずも兩聖共に示寂された。あゝ、悲むべきは法燈の忽ちに消へたこゝである。慶ぶべきは鈔記の早く終つたこゝである。予若し黙止し終らんか、悔を千載に貽したであらふ。この鈔一部七卷は、相傳の義を記したのであるが、定めて誤りがあるであらふ。留て之を後賢に贈る、決して添削を恐れ給ふな。沙門了惠謹書こ記されてある。

#### 七、選擇大綱鈔三卷

この書は永仁四年夏中に草記されたものである。蓋し望西の眞意は此書にあるか。

#### 八、論註拾遺鈔三卷

この書の著述に關する委しいこゝを知るこゝは出來ない。唯だ最後に嘉元四年之を記し畢るこゝ記されてあるのみである。一説に依れば名越の尊觀の弟子良然の作であるこゝ。

#### 九、傳通記料簡鈔六卷

この書は文保元年に著はされたものである。然しながら不幸にして余は未だこの本を見たこゝがない。

#### 十、扶選擇正輪通義一卷

#### 十一、新扶選擇報恩集二卷

元亨二年十月上旬、此等の書を著はして、明惠上人の摧邪輪、並に莊嚴記を反駁し、選擇集を辨護された。その護法心の熱烈なるこゝは、かの序文に明かである。即ちかの集の序に云く、

舊し聞く高山寺の辨上人は、華嚴宗乘の碩徳、博學多聞の導師なり、道俗貴賤誰れか仰がざる者あらんや。嘗て摧邪輪を作つて選擇集を破す。寔に以れば達士の難破、筆鋒利なり。雖も、祖師の弘化流傳妨ぐるこなし。能破の義遠つて摧け、所述の文漸く隱る。摧轄已に昔日に脱し、邪輪徒に他世に廻る。故に人この書を呼んで邪輪といふ、また宜ならずや。然り。雖も、子孫の末に居て父祖の本を扶けるは、先賢の軌範にして後學の報恩なり。妙樂の清涼の妨を徵論し、戒度の道因の破を會通するが如きは、乃ちその先蹤なり。いかに況んや、長樂寺の寛律師は、顯選擇を造つて定照の愚難を破し、朝日山の寂上人は慧命義を撰して高辨の邪輪を會するをや。予苟も黒谷の餘流を酌み、漸く白道の正路に赴くは偏にこれ祖師の慈恩なり。豈に選擇の惡化にあらずや。なんぞ報恩の道を忘れて、謝徳の思ひなからんや。たゞその理に長ずるを取り、その情に黨するこを作さず。是に於て編撰す。昔し覺性上人證大いふ者あり。扶選擇論七卷、護源報恩論一卷を作り、反て邪輪を破して廣く選擇を扶く。その義多く天台宗に據り、かの文未だ京師の意を盡さず、遺恨なくんばあらず。是を以て今略して大師の宗義を述べて選擇の勸化を扶け、重ねて邪輪難破の綱要を會して祖師報恩の萬一に擬す。故に題して新扶選擇報恩集と名く。時や元亨第二の曆。初冬上旬の辰といふここ爾り。

十二、天台菩薩戒義疏見聞七卷

この書は元徳二年十二月十一日に著はされたものである。

十三、無量壽經大意一卷

十四、往生論註略鈔二卷

十五、往生拾因私記三卷

已上の三書は選述の年代が記されてない。了惠の書物は、大抵みな序文か跋文があつて、選述の事情年月等が明されてあるのに、これらの三書は何故か全くそれが示されてない。然しながら了惠の著書の大部分に、著述年代が記されてあ

ることは、まことに喜ばしいことである。

あ、上人寂を示して、既に六百の星霜を送つた。然し此等の著書を通して上人の思想を知ることが出来たのは、寔に吾々の幸福である。上人の徳はこの著書と共に、上人の努力は、上人の光は、この書と共に永遠に輝くことであらふ。今上人の六百回忌を邀ふるに方つて、同志相謀りて、上人の學徳の幾分をも、社會に紹介せんとして、この號を發刊したのである。